

〔普及の現場から〕

飼料イネの生産広がる 勝英地域

勝英農業普及指導センター

1. はじめに

勝英普及指導センター管内での飼料イネ生産は、平成15年頃から勝央町で1戸の酪農家が生産・利用していましたが、平成17年から奈義町で耕種農家が転作作物の一つとして飼料イネを試験的に導入したことにより、奈義町を中心に生産拡大が進んできました。

奈義町での耕種農家と畜産農家が連携した飼料イネ生産利用の取り組みがモデルとなって管内の他市町に波及し、21年度には大幅に拡大しました。

ここでは、その状況や取り組み等について紹介します。

2. 生産と利用の拡大

表1は、勝英管内の飼料イネ栽培面積の推移を示したものです。

平成18年から耕畜連携による飼料イネの生産利用が進み、平成20年までは奈義町を中心に増加してきました。この拡大気運の高まりの中で勝英農協が専用収穫機（細断型）導入を決め、関係機関が連携して推進したことで、平成21年の栽培面積は、奈義町での倍増、勝央町での大幅な拡大等で、平成18年の約5haから約36haの作付けへと大幅に増加しました。

栽培方式では、育苗労力の省ける湛水直播栽培

が、面積の多い大規模農家や集落営農組織などで取り込まれ、徐々に増えてきました。

利用については、酪農家での利用を中心に増えてきていますが、平成20年、奈義町で肥育牛への給与実証がなされたことなどから利用の気運が高まり、今年は肉用牛農家での利用も増えてきています。

3. 作業請負組織の立ち上げ

今年度、勝英農協が細断型専用収穫機を導入したことから、当地域のコントラクター組織の立ち上げが課題でした。収穫期前の8月22日、待望の作業請負組織「勝英コントラクター組合」

（組合長；長尾隆大、組合員37名）が立ち上げられました。これで、耕種農家等によって栽培された飼料イネが収穫調製され、畜産農家に利用される体制、いわゆる地域飼料イネ耕畜連携システム（図1）が当管内で整ったと言えます。

さっそく、8月25日、機械の試運転を兼ねたオペレーターの作業研修会を実施し、9月上旬からの本格的な収穫作業に備えました。

品種構成が単一（ヒノヒカリ）で、面積が36haもの飼料イネを「勝英コントラクター組合」だけで適期に収穫することは

不可能です。津山地域コントラクターの応援をもらいながら、10月半ばに収穫作業を終えました。

表1 勝英管内の飼料イネ栽培面積の推移

(単位:ha)

	H18	H19	H20	H21
勝央町	1.2(－)	1.0(－)	1.0(－)	11.0(－)
奈義町	4.2(0.3)	7.3(2.5)	11.9(3.8)	23.0(6.3)
美作市(旧大原町)				2.1(2.1)
合計	5.4(0.3)	8.3(2.5)	12.9(3.8)	36.1(8.4)

※数値は普及センター調べ。()は直播栽培面積。

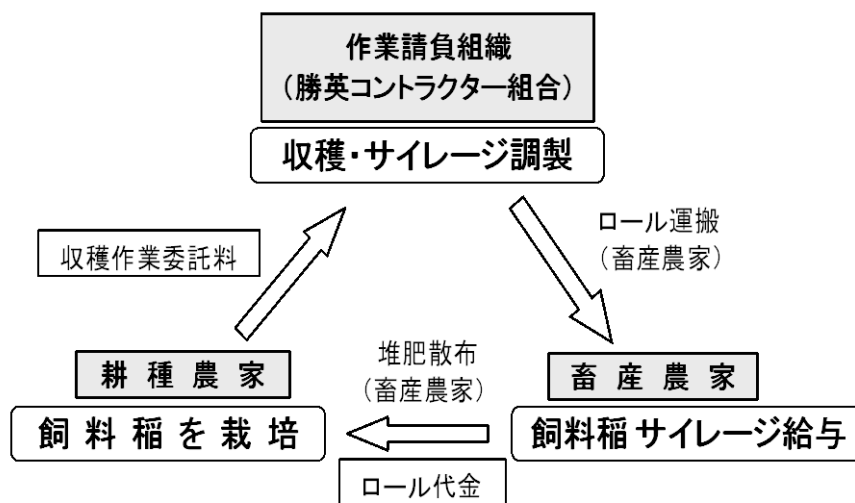


図1 勝英地域飼料稲耕畜連携システム

4. 晩生品種導入の模索

当管内では、飼料イネの品種はヒノヒカリを推進してきました。しかし、面積が大幅に拡大し、1品種だけの作付けでは適期収穫の期間が限定されることから、収穫期間の拡大をはかるためには他品種の導入が必要となってきています。

そこで、今年、晩生種の導入を模索するため、奈義町でアケボノの湛水直播（カルパーコーティング）栽培実証を行いました。

その結果は、表2のとおりです。麦跡であったため、対照のヒノヒカリ（湛水直播）の収量が今一つであったものの、アケボノは、そ

れを大きく上回る生草収量3, 533kg/10a（実収量10ロール/10a）となりました。10月8日の広戸風でも圃場の一部がなびく程度にとどまり、倒伏の問題もほとんどないものと思われました。

次年度からの導入に向けて、関係機関を交えた検討を行っていく予定です。

表2 実証ほの生育調査、収量調査の結果

区名	アケボノ区	ヒノヒカリ区（対照）
播種期	6月7日	6月12日
出穂期	9月14日	9月8日
収穫期	10月6日（糊熟期）	10月6日（糊熟期）
1㎡当たり穂数	384本	429本
坪刈収量（生草）	3, 533kg/10a	2, 560kg/10a
実収穫ロール数	10個/10a	7個/10a